

# イヴリン・ウォー覚え書き (四)

——フライト家とクラウチバック家——

大 林 幹 明

イヴリン・ウォー (Evelyn Waugh) は、後期の傑作『ブライスヘッド再訪』(*Brideshead Revisited*)のフライト家(the Flytes)と、第二次大戦を主題として書いた『兵士』(*Men at Arms*)、『士官と紳士』(*Officers and Gentlemen*)そして『無条件降伏』(*Unconditional Surrender*)の三部からなる小説を通じての主人公、ガイ・クラウチバック(Guy Crouchback)の出であるクラウチバック家(the Crouchbacks)を通して、イギリス支配層の一側面を示した。時代的には、1920年代から、第二次世界大戦終了までである。

1920年代とはもちろん、第一次世界大戦のすぐあとに続く10年であり、戦争の影響が、どれほど大きかったかは容易に想像できるし、1930年代から、第二次世界大戦終了にいたるまでの、ヨーロッパのみならず、全世界の混乱が、それに匹敵するものであったことも事実である。むしろそれら全体を一つの時期として把握した方が正しいともいえる。そのような時にあたって、支配層の一面を代表する両一族が、どのように行動したかは、興味ある問題である。多様に展開される内部的、外部的な諸々の人間関係の力学の中にあって、一族が、あるいはそのメンバーが、自己を保持しつつどう生きのびてきたか。新しい時代の流れと、古い時代のそれとが衝突し、渦巻となり、全体が未だ歴史上経験されたことのない、いわば未知の大洋にむかって流れる中で、ある時はそれに抵抗し、ある時はそれに棹さしながら、歴史の流れの中に生きていく姿を読み進みながら、これらの小説を解明すると同時に、作者ウォーの小説家としての本質をさぐることは、興味

のつきない主題である。

先に掲げた4つの小説のうち『ブライスヘッド再訪』はそれだけで独立した小説として書かれているが、残りの3冊についていえば、ウォーは、それらが全体として一つのまとまりをもつ三部作として書きあげた。従って、実質的には、2つの小説を検討することと変らない。それらの小説が扱う時代的な経過は、前者が1920年代と、1930年代、第二次大戦が始まる直前までの時期であり、後者は、1939年以降、第二次大戦終了までとなっている。

『ブライスヘッド再訪』が最初に発表されたのは、1945年である。ウォーは、それから14年後の1954年、それに「はしがき」を付している。その最後のところで彼は、この小説が1920年代、30年代について主として書かれているけれども、その時代の記念というよりはむしろ第二次大戦のそれとして若い世代の読者に呈示されたものだという趣旨を述べている。これは若干紛らわしい書き方だが、次のような事情による。この小説が1945年に発表されたことからわかるように、ウォーはこの小説を第二次大戦中に書いた。その前後の事情については、「はしがき」の最初の方でふれているが、この作品は彼が戦争に従軍した結果負傷して、治療のため休暇をもらい、それを延長してもらい書きあげた。ただ何分にも、戦争中ということであって、文学的な空腹状態のなかで書かれていて、15年近くたって、ということは諸々の文学活動が再開して活況を呈している時に読み返してみると、やはり不満が目につく。それは、彼が作品中にえがき出した時代、あるいはその当時からみた現時点に対していただいていた認識が正しくなかったこと、文体的にも時代や環境がかわった今、適切とはいえない部分が多々あるということにある。しかしそれを修正すれば、大幅に書き改めねばならず、それが出来ない以上結局この作品は、執筆時、即ち第二次大戦時の作者の姿ということにならざるを得ないという意味でその時代の記念といえるが、内容的にはあくまでも1920年代、30年代前半を扱っている。一口に15年というが、その間に、1954年という、いってみれば戦後のイギリス小説の動きの中にあって、一つの画期的な年を中間にはさんでみれば、その間の時間の経過が大きな意味をもっていたこと

は、容易に判明する。

他方、『戦士』、『士官と紳士』、『無条件降伏』については、すでに述べたごとく、それらが三部作として、全体として一つのまとまったものであり、時間的には『兵士』のプロローグ、「名誉の剣」の第一章で、主人公ガイ・クラウチバックが、独ソ不可侵条約締結のニュースを見て、彼が歴史に参加する大儀名分を見出し、勇躍決意するという、即わち、1939年から、第二次大戦に参加して、その実態を自ずから体験しつつ終戦を迎えるまでの約5年間にしぼられる。これらの作品のうち、最初の『兵士』が1952年、次の『士官と紳士』が1955年に対し、第三作の『無条件降伏』は1961年と多少時間的な開きがあることは事実であり、この第三作の冒頭に前二作の要約にあたるものが付されていて、小説として、若干奇異な感じがしないでもないが、全体としてはまとまったものである。

このように、二単位、四作品といってもいい一連の作品によって、ウォーは、イギリス支配層の一側面を1920年代から40年代の中間にかけての35年余を、はじめの30年はフライト家、後の5年はクラウチバック家を中心とする様々な人物の生き方を通してえがいた。そのなかで、『ブライスヘッド再訪』においては、その一族に流れるいわば内的要因にもとづいて、あるいはそれに動かされて彼らがどのように生きたかであるのに対し、三部作においては、むしろ外部的作用ないし外的要因による動きが中心になっている。そこには、時間的な前後もあるが、同時に視点の相違も伴っているということが出来るので、以下その点を中心に話をすすめる。

『ブライスヘッド再訪』はイギリスの支配層、エリート階級及び彼らの生活する場を示して出色の作品といえる。プロローグに続く第一篇「かつてアルカディアに」の第一章の冒頭の部分に印象的なオックスフォードの町の描写がある。そもそもこの小説は、語り手であるチャールス・ライダー（Charles Ryder）が第二次大戦中、中隊を引率してキャンプを移動させ、たまたまその目的地が、ブライスヘッドであったことから、彼の昔がよみがえって、話が展開するという構成

になる。第一章では、彼がフライト家の二男セバスチアン (Sebastian) に会うことが書かれているが、その機縁は、二人とも当時オックスフォード大学の学生だったことによる。1923年、第一次大戦が終了して数年後、町も再びそれ以前の状態にもどりつつあるとはいえ、当然のことながら、もとに戻り得ない場合もある。その古いものを保持しながらも、新しいものが少しずつ侵入してくるこの町のただずまいの描写は、オックスフォードの魅力を伝えて、余すところを知らない。おそらくあらゆる案内書、解説書に勝るこの町の手引といえよう。

また、彼のいところで同大学の先輩が、大学での生活上の諸々の注意をライダーに与える。例えばそれは服装のことから始まり専攻科目のとり方とか、それぞれの科目に対する一般的な評価といったこの大学でもごく普通にみられる情景から、いわゆるカレッジの生態といった、我々とは異質な事についての話に及びそれらは、それだけとり出しても、一つの魅力ある話題を構成する。そのようななかでのセバスチアンとライダーの出会いということになるのだが、セバスチアンを含むフライト家がこの小説の中心となる。

ウォーは、1959年新しくこの小説につけた「はしがき」の中でその主題に関して、次のように述べた。「この小説の主題、即ち、一群の異なった、しかし密接に結びあわされた人々のうえに、神の恩寵がどのように働くかということ、おそらくとほうもなく大きなものであった。しかし私はそのことについて弁解はしない。」この密接に結びあわされた人々の中心がフライト家に他ならない。マーチメイン卿 (Lord Marchmain) とその妻テレサ (Teresa)、長男ブライスヘッド (Brideshead)、妹のジュリア (Julia) 及びコーディア (Cordelia) そしてセバスチアンである。ライダーが彼らと知り会う前後の事情、意味は次のようなものであった。当時カレッジは異なる二人が会ったのは、ライダーの部屋がたまたま一階にあったという偶然による。しかしセバスチアンを知るようになったことが、ライダーのその後の大学生活に大きな影響をもつようになるほど二人の出会いは重要な事件であった。セバスチアンは、大学で対抗ボートのある日ライダーを案内して、フライト家のあるブライスヘッドへ導く。フライト家は古くか

らの血をひく家柄の一族であり町から車で数時間のところにある。そのような一族の住居はどのようなものであるかは、同じく第一章の記述をみると容易に想像がつくのだけれども、そこへ案内する折のセバスチャンの態度から、ライダーは普通とは異なる何かをかぎとっていた。

もつとも、セバスチャンが風変わりだということは、この時にはじめて明きらかになったことではない。ことに大学内にあっては、彼が他とは一風変っていることが前々から評判になっていたことであり、ある意味では公知の事実であった。彼の兄ブライスヘッドは同様にオックスフォード大学の出であるが、兄については温和で、老人のような人物として通っていたのに対し、セバスチャンは全くその反対といえる。ライダーにしても、実際に彼を知る以前からすでにセバスチャンという風変わりな人物がいることは承知していて、その理由は、一方では、人を引きつけるような美男子であったということと、他方その行動の奇矯さであった。特にその変った態度は、その限界を知らないかみえた。従って、ライダーがブライスヘッドを訪ねて、改めて、普通と異なる何かに気づいたとしても、それは一連の態度の一つといえるのだけれども、そこには、家族に対する態度ということで、彼のその後の展開を知る一つの手がかり的意味をみる事が可能である。

セバスチャンの風変わりな振舞いがただ単にそれだけとして終るならば、それは一人の人生における変った生き方として終るだけであるが、この小説では、そのことが因となり果となって、ライダーはじめ他の人生に様々な影響を及ぼす。例えば、彼らはロンドンのパーティーで事件をおこし、その筋と問題をおこす。セバスチャンの家族はそのもみ消しのために八方手をつくしてその件は丸くおさめるわけだけれども、家族の監視の目はきびしくなる。特に母親は、彼を気づかって大学関係の者に目付的役割をはたさせるし、彼は彼で、酒を飲むようになる。クリスマスに一族が集まった折も、彼が酒を飲まないようにするわけだが、彼はあれこれと工夫をこらして抵抗する。ライダーはその場に招かれていたわけだが、セバスチャンは彼を口説いて、皆が猟に出た折、別れてパブで酒を飲めるように手配する。ライダーは彼に対する友情と、家族に対する立場から苦境に立たざる

を得ない。それは、彼の立場において、ある二つの力が集中的に交わり会っていると見えるからかもしれない。

この小説には、大きくみて2つの力の拮抗がみられる。その力とは、新旧のそれであって、伝統的な考え方というのはそれとして存在するが、新しい傾向としては、ライダーの副官にみられる一つの立場がそれを最も典型的に示している。それを史的唯物論と一口に言ってしまえば簡単だが、結局はそこへ落着くわけで、例えば歴史というものを、すべてそれを規定する下部構造ないし生産関係の力に求めるという立場で、そこではいわゆる英雄の歴史というものは抹殺される。あらゆる国には、それぞれに歴史上の英雄がいるのだし、彼らの活躍した戦争というものが存在する。しかし新しい歴史においては、そういったものは一切除かれていて、例えば、マラトン、ロンズヴェイル、バノックバーン等々はすべて意味を失う。そういう一切を歴史の必然で考えるような態度をライダーは完全には是認できないという立場であり、彼自身の立場が二つの拮抗する力のいずれにもコミットし得ないものである。彼がセバスチャンと、その家族の中間に位置してしまったということは、ある意味では、正に彼のそういう立場があらわれたものに他ならない。

この二つの力の拮抗という点で考えねばならないのは、フライト家の宗教がカトリックであるという点である。周知のごとく、イギリスは宗教的には国教会をその中心としている。そのような事情のもとにおいて、カトリックであるかどうかのようなこととなるか。端的に言って、女がカトリックであると結婚の障害となる。この小説、第二篇、第二章で、ウォーはこのへんの事情を次のように説明している。ある一家にとって、「弟たちの務めは、なにかの機会に災害が彼らを兄の地位につかせるまでは、表に出ないようにして待機していることであって、彼らの役割がそのようなものであるからには、そのような場合が生じたときには、いつでもそれに答えられるようにしておくことが望ましい。だから、三人か四人の息子のいる家族の場合、末の息子なら反対を受けずにカトリックの女と結婚できるかもしれない。」ジュリアは、カトリックの家庭に育ったのであり、結婚の相手

は、以上の事由から制限を受けるのに対し、彼女の結婚に対する希望は、大きなものであった。

当然彼女は、そのような情況に抵抗する。そこに大きな軋轢が生ずることは明らかである。結局彼女はレックス・モットラム (Rex Mottram) という男と結婚するのだがそれは失敗に帰する。そんな折、彼女の前にあらわれたのはこの小説の語り手でもあったライダーに他ならなかった。彼ら二人の最初の出会いは、セバスチャンが、ライダーを始めて生家に連れていった時に遡る。この折セバスチャンは、ライダーを家族の誰れにも会わせたくなかった。しかしたまたま家に帰っていたジュリアと車ですれ違うという形で出会った。この出会いは、最後にライダーと彼女が結婚の寸前までゆきながら、結局実現できなかったという事情を暗示してなかなか意味深い出会いだったといえるのだが、とにかくそれ以後二人は幾度か会う機会はあるけれども、それはただ単にセバスチャンの家族の一員と会うという形式においてであって、彼も彼女もただそういう形での出会い以上のものは感じていない。

その二人が幾年か後一緒になろうとしたとはいえ、その折には、二人ともそれぞれに配偶者を持つ身であった。従って、そこには、様々な障害があるわけだが、それにもかかわらず二人は一つづつそれらを取り除き、順次目的へと接近するが結局実現しない。その事情がまた非常に象徴的な事件にからまっていると思われる。彼女の父、マーチメイン卿は、カトリックの信者であったが、ある時、家を出てイタリアに移り住む決心をして、それを実行する。その辺の事情についてというよりも彼の宗教についてライダーはセバスチャンに聞いたことがある。「お父さんは信仰をすててしまったか？」と。それに対してセバスチャンは、「ある意味ではそうせざるを得なかった。彼は、お母さんと結婚するとき、カトリックを信じたにすぎない。彼がイタリアへ行ってしまった時、家族の他の者と一緒に信仰も置いていってしまった。」と答えている。マーチメイン卿は、従って形式的にはカトリック信者だが実質上は、信仰をしていたわけではない。ジュリアとライダーが結婚へむけて努力を傾けていた折、突然マーチメイン卿がイタリアか

#### イヴリン・ウォー覚え書き (四)

ら帰ってくるということになった。もちろん折から始まったヨーロッパの混乱のためではあるが老齢になったためということもからんでいる。彼は帰国後、ブライスヘッドの自宅に住むのだが次第に健康もおとろえ、寝たきりの状態となり死は時間の問題となって、彼に対し臨終の儀式をどうするかという問題が生ずる。カトリックの教義に従えば、当然神父を招び、最後の祈りをしてもらうことになるのだけれども、一度は信仰を捨てたも同然にして家を離れた人にそれをするのが適切かどうか。ライダーはそれに反対するのだが、結局神父を招ぶこととなり祈りが唱えられる。その折、それまで意識もはっきりしなかったマーチメイン卿は、神父の祈りが終ると静かに手で十字を描き、死を迎える。ライダーは、それをみて、すべてが終わったことを悟る。事実葬儀終了後、ジュリアに、二人が一緒になることは不可能であると告げられるのであった。

理屈はこうである。マーチメイン卿が信仰という点からみて、様々な問題があることは事実である。カトリックの教えに則った生活を送らない事はもちろん、外国で別な女と生活するといった事情を考えてもそれはいえる。彼がたまたまイギリスへ帰ってきたことが、ヨーロッパの戦争による混乱であり年齢的に先が長くないという事情も偶然というか周囲の事情としてみることは出来る。しかし臨終の折に神父の祈りに対し、それまで意識もなく横たわっていた彼が自ずから十字を描いたということは、そこにカトリックという宗教のもつ力を否定することは出来ないだろう。その信仰がフライト家代々のものであるという事情を考えれば、それはなおさらであると思われる。しかもその場に立合ったジュリアにせよ、ライダーにせよ、その事実を目にして、結局二人は一緒になることが不可能であることを悟らざるを得なかった。先にふれたように、ジュリアにせよ、ライダーにせよ、当時配偶者のいたことは事実であり、周知のごとく、カトリックでは、離婚は出来ない。ライダーの信仰についていえば、彼の若い頃の教会の牧師は、いわゆる聖書の科学的解釈という理屈で、例えば奇跡であるとか、復活ということは、現代科学では説明できない事であるということを公言してはばからない。しかしライダー自身はそこまで徹底できない。彼は、あまり先進的な思想には同



調できないとしても、古いものをそのまま守るということはないので、信仰ということも、従来の伝統をそのまま守るという態度ではない。他方ジュリアにしても、かつてセバスチャンは、彼女の信仰を評して半異端であるといった。これはもちろん伝統的なものをそのまま守るものではないという程度においてそうだというだけのことであり、彼女はれっきとしたカトリックの信者であって、そういう点からいえば、離婚から再婚へという手順が不可能なことは、十二分に理解されているはずである。それにもかかわらず二人はその手続をあえてすすめたのだから、その決意の程度が、どれほど大きなものであったかは容易に理解できる。しかしそれにもかかわらず、二人は最後の目的を達することが出来なかった。というよりも、ライダーが、結局マーチメイン卿の最後に立会った結果、ジュリアは決断出来ないだろうということを感じ、最後までその予測どおりになったというのが正しいだろう。その契機となったのが以上の事情であり、彼女に即していえば、それは彼女の少女の頃からの信仰という彼女の内在的要因、その契機はなるほど、父の死という外部的なものに触発されているとはいえ、内在的なものであったということを我々は注目する必要があるだろう。

ジュリアのカトリック信仰と、それが彼女の最後の決断に及ぼした力といったものを以上のようにみてくると、セバスチャンの信仰というものがどうしてもさけられなくなる。それについて特に印象深いのは、彼が、「カトリック信者であるということは、大変むずかしいことだ」といった事である。これは、ライダーがセバスチャンと知り合うようになってからしばらくのあいだ彼の信仰が謎であって、ただ彼はそれを別に急いで解いてみたいとは思っていなかった。もちろん、彼との会話に出るちょっとした言葉などから、彼がカトリックを信じているとは思っていたけれども、しかしそれは、彼がいつも手ばなさないぬいぐるみの熊のようなものだと思っていた。そのような文脈のところでは前記の彼の言葉があって、ライダーは意外なというか、びっくりした印象をもった。セバスチャンの信仰について手がかりになる表現は他にもある。彼とライダーが家族のことについて話し、談たまたま宗教のことに及んだ折、セバスチャンは、家族のそれについて、

「自分たちは宗教的には混合家族である。兄とコーデリアは熱心なカトリック信者、自分とジュリアは半異端、母親は一般には聖者と信じられている」と言った後、「もっとカトリックが好きになればいいのだが」と言う。カトリックであることは、困難なことだというあたりからは、彼が本当に信者として努力していることがうかがえるし、自分がもっと好きになればということは、自分の信仰がいたらないのとは別に、現状に対する不満があって、自分なりの考えとは異なっていることを伺わせる部分であるし、そういった心の葛藤のようなものが感じられる。彼の振舞いが風変わりであることについては先に述べたが、その原因は、そういったところにもありそうだ。そしてそれについて、家族はなにかと口出しをしてくる。彼の希望は、もっと一人でおいてほしいということなのに事態は常にその反対の方向へ、彼の監視が強まる方へと進む。しかもその元には母親がいて、彼女はしかし一般には聖者のように思われているとしたらば、セバスチャンの心がどのようなものであったかは容易に想像できる。

結局セバスチャンはそういった周囲からの目というか圧力によって大学を休み、精神鑑定を受けるためドイツへむかうが、パリで行方をくらましてしまう。我々としては、彼が結局どうなったかは大いに興味のあるところだけれど、それについては彼は最終的には、北アフリカのアルジェリアに現われて、そこで酒で身体を消耗して、ある修道院に来て、奉仕活動をしたいというのだが断られる。けれども彼は度々そこを訪ねる。そしてある日行き倒れのようにして発見され手当てを受けるが快方にむかうとそこに住みついて、何かと手伝いのようなことをして過すことになる。以上の事情については、コーデリアの報告ということで知らされるのだけれども、ここで注目すべきは、彼女が、彼について、次のように考えていることではなからうか。セバスチャンのことを話して彼女は彼も含めて、彼と似たような人々を知っているが、そういう人々は、神に大変近くまた愛されている。彼もその土地で何かと役に立つ生活をし、それ故祈りにも加えてもらい、そんなふうにしてある日死を迎えるに及び最後の祈りをしてもらいそれにほんのまぶたの一瞬の動きで答えるような形になるかもしれないとしても、それは人生

#### イヴリン・ウォー覚え書き（四）

を終らせる悪い方法ではないのではないかと述べる点である。セバスチャンは、他の人々、特に家族の人々にとっては、何か風変りな軌道をはずれた困った存在として扱われたとしても、彼は彼なりの方法によって、自分にふさわしい生き方を行なったのであって、しかもそれがあある意味では神に近く、最も彼にふさわしい信仰のし方であったといえなくもないし、それは彼の内心というか内側の力に従って行動した結果そうなったと考えることが出来る。

ウォーが第二次大戦を素材にして書いた三部作小説の最初が『戦士』これを始めとして、すでに述べたように、『士官と紳士』『無条件降伏』と続くわけであるが、それらを通して中心となるのが、ガイ・クラウチバックである。『戦士』のプロローグ、「名誉の剣」の冒頭は、彼の祖父母が、ハネムーンでローマへ行き、法王の祝福を受け、その後ヨットで、サンタ・ダルシナへ廻り、そこに邸宅を構える話で始まることからわかるとおり、クラウチバック家は、歴史を誇る名門で、カトリック信者の家系である。しかもガイは4人兄弟であることも、フライト家の場合とよく似た境遇にある一族だということが頭に浮ぶ。彼らは、エリートであり、支配者の側にたった人物達だということである。従って、ガイの心に支配者の側にたった論理があるとしても不思議ではない。自分達こそ、人々を指導してゆく国家の担い手であるという論理である。日々を気楽に、毎日を安逸に暮らす連中を引いて国家の目的にむかって進ませるのは、自分達をおいて他にない。それは、支配者層、エリートの意義であり、恐らくは一般の意識からすれば、政治は支配者の、彼らの仕事であるとして、被支配者階級からは攻撃されかねないものではあっても、長い伝統の中で形成されたこの種の意識がそう簡単に失なわれるものではない。しかし、社会が徐々にではあっても、確実に変化しつつあり、そういう意識が常に現代において維持され得ないものでもある。現代という時代と、古い時代の意識との間隙は、次第に増大していく。従って、自分の立場こそは正義であると考えても、それが必らずしも額面どうり受入れられ、またその通りになるという保障はどこにもない。己の義とするものが常に必らずしも全員に

義とされるものでもない。ガイの立場からいって正しいことも、単なる彼の思い入れにすぎない場合もあり、またよしんばそうでないとしても、現実それが成り立ち得ない事態に立ち至っていることもあり、そういう事情を創りだしているのは、彼の外に働いている世界の、ここでは主として政治の力学であり、彼はそういう力というものを終局的には、承認せざるを得なくなる。それはフライト家の若い人々が、それぞれの願望を実現せんと努力しながら、結局それを完全にはなし得ずに終らねばならなかったことと同じ論理といえる。ただ異なることは、その力が、フライト家の人々にとっては、内なる力として働いたのに対し、ガイの場合それが外からの力として作用しているという点である。

主人公ガイは、ドイツとソ連との不可侵条約が結ばれたニュースを新聞が報じた頃、祖父がはじめた、サンタ・ダルシナの邸宅で生活していた。そこで独ソの条約を報じた新聞を読んだ彼は、遂に現代がその正体を露わにし、ようやくにして、自分の出る番があらわれたことにより、心が落ち着くのを感じたのである。「敵は遂にそれまでの、あらゆる変装をすてて、巨大でにくむべき姿となって、はっきりと視野のうちにあらわれた。武装した現代という敵が。結果がどのようなものになるにせよ、その敵に立ちむかう戦のうちに、自分の占める位置はある。」これが、ガイの決意であり、彼の義とするところは、この巨大な敵に支配者として立ちむかうことであって、旧家名門に生まれた彼の使命は、今やはっきりしたと思った。そこでロンドンへ戻り、彼は、つてを求めて各方面へ手紙を出し、軍隊へ任官の依頼をする。しかしこの年35才の彼は年齢的に第一線部隊を指揮するには、年をとりすぎている。彼が容易に仕事を見出せないことは、初めから予想されたことではあった。八方手をつくした後、彼は父の逗留しているロンドンから列車で半日ほどの海岸にあるマリン・ホテルへ出かけ、そこで数日を過ごすのだが、彼が軍隊に地位を得られたのは、そこで生じた偶然によることであって、彼の決意の実現の冒頭から、彼は自己の外に働く力にほんろうされる。これは全体への象徴的な出来事として考えられる事件であった。

紆余曲折を経て軍隊内に地位を得たガイが結局そこを離れなければならない事

情は『戦士』の最後に述べられている通りである。ダカールの偵察戦に従がって、同港の外まで進んだ部隊は、しかしながら、上陸して偵察することをせずして引あげる事となった。だが彼の直近の上官は、手柄をたてたく、一計を案じてガイを指揮官として、暗夜に小隊を上陸させる。もちろんガイは、その指揮官に従ったままである。作戦は、前半はどうか順調にすすんだのだが、途中で敵と遭遇し攻撃を受ける。結局全員が艦に引あげてはくるのだが、一人だけ負傷したが、それが秘かに変装して彼に従っていた命令を下した当の指揮官であって、そのため、彼はなんとか部隊にとどまれそうな気配であったのだが、別の事件がからまって、結局同部隊をはなれなければならない事態を招く。

もちろんガイとしては、それなりの責任はあるとしても、彼の運命を支配したものは、その折の血気にはやる指揮官の功名心による抜けがけの行動であるし、また部隊の都合といった事情に支配された、ある意味では、御都合主義的な関係もからんで、彼自身のまわりに働らいている様々な力関係のなせるわざであり、それらの複雑にからみあった時代の相によることは明きらかである。もうすこしいえば、軍隊を動かしている組織のメカニズムといった方が適切であろう。ガイは当初の純粋な決意にもかかわらず、様々な不純な要因に結局は巻き込まれざるを得ないわけで、そこに抵抗することのできない力の存在というものを意識しないわけにはいかない。

ところが、彼を再び軍隊に呼びもどしたのがこれまた部隊の事情という背景であった。ガイは、特別部隊の編成にともなって再び中隊を引きいることとなる。『士官と紳士』は彼がエジプトに駐留の後、クレタ島の攻防に関与する間の事情を扱った、時期的には、1941年から、1943年に至る間の物語である。

この期間については、別にイギリス国民の戦意高揚の為の作戦が並行的に扱われて、そこにも個人の力ではいかんともし得ない巨大な機構、特に戦争のもつメカニズムというものを余すところなく示している。しかも『ブライスヘッド再訪』以来、ウォーは一貫して伝統的なイギリス小説の手法によって書いているのだけれども、この話についていえば、もちろん初期の作品にみられるほどのもの

ではないにしても喜劇的に事態を風刺する態度の片鱗がのぞいている。

この作戦は、そもそもニュース・バリューを狙った軍事上はあまり意味のないものであって、それを指揮したのは、かつてガイと一緒に訓練を受けたトリマー (Trimmer) という男であった。フランス、シエルブールの近くに上陸し攻撃を行なう。実行に際し、トリマーはいささか不十分なことしか出来なかったがとにかく一応所期の目的は達成された。しかしそれは決して大戦果といえるほどのものではなかった。ところが、それが国内向けの報道になると、イギリスには、ドイツと異なりかくも立派に任務を遂行する国民が存在するということの大々的な宣伝となる。そもそもこのトリマーという男は、もと平時において大西洋横断航路の船の美容師をしていた男であり、それぞれの場合に応じていくつかの名前を使いわけている男であった。従って、本来ならば、軍隊に向かない男であるが、そのような前歴のゆえにかえて利用された。支配層としては、イギリスには、ドイツと異なり、ユンカーといった階級は存在しないが、一朝事あるときは、それぞれに本分をつくして努力する国民であり、それ故に軍隊にあっては、身分とは別に英雄になれるということを示さんとすることに主眼があった。それによって、一般の人々の戦争に対する志気を高揚させることを目的としたわけである。同時にこの作戦を利用してアメリカ及び同国民の協力を一層大きなものにするというところが目的である。そこに作用しているものは、戦争を勝利へ導く為にはどのような事でもやる、あるいはやらざるを得ないという戦争自体のもつ独自の論理であって、なるほど彼は英雄ではあるが、この戦争自体のもつ論理に動かされる将棋の駒にすぎない。いってみれば、彼が作られた英雄であることは自明のことで、また作戦的に各地をまわって民衆に顔をみせるという仕事をしなければならぬことは、自然の勢いであつたが、彼としてはとてもそういったことに気が乗らない。全くの操り人形なのだが、気がついた時には、注目を一身に浴びる立場となっていた。他方自ずからの意志によって参加したガイは、彼とは全く逆で、敗戦の苦悩を味わいながらクレタ島の作戦に従事していた。

ここにみられるガイの立場は、望まずして脚光を浴びたトリマーと実に対照的

#### イヴリン・ウォー覚え書き（四）

といえる。本来のクレタにおける戦いが敗戦であったことから、これは当然予想されたことではあるが、ここに現実の戦争というものの苛酷さを見ることが出来る。風雲急を告げるクレタ島へ派遣されたガイの部隊は結局その島が維持出来ないことから撤退の方針となり、その最後をしめくくる役となった。最後をしめくくるといっても、それは敵に降伏するという割の合わない仕事である。その最後の時にあたりたまたま一隻の船が残り、ガイは、それに乗って島を撤退するのだが地中海を漂流することとなる。運よく救助されはしたがアレキサンドリアの病院に収容される。第二次大戦初期、ドイツ、イタリアの優勢であった時期における英国の敗退はガイにとって非常な衝撃であった。しかし、戦闘に敗れたことは冷酷な事実として一応は納得できるとしても、それに際して展開された人間関係というか、人間本来のみにくさというものの影響の方がより大きかった。ガイの人生観というか基本的立場はエリート、支配層のそれであって、ともすれば怠惰になりがちな一般国民を率いて叱咤激励して、国家の目的遂行にむかわせる、国民をリードすることが彼や彼と同じ立場にたつ者たちの高貴な論理のはずなのだが、実際の撤退作戦で露呈された裏面は彼のそういった考えをゆるがせるに十分であった。

彼の上官クレアは、撤退作戦の護衛として、最後まで島にとどまって、それを完了させることが任務だったが、彼はそれを放棄してしまった。しかも悪いことにガイはその間の事情を知っている。もしそれが知れると当然クレアの経歴にきずがつくこととなる。そこで彼の名声をかばおうとする周囲は、一応ほとぼりのさめるまで、彼をインドへ派遣し、他方その間の事情を知っているガイは、本国へ帰るにしても、なるべく時間のかかる方法で帰そうと画作する。ロンドンへ帰りついて、ガイはこのことを口外はしなかった。

ガイの心を動揺させたのは、それだけではない。話は前後するが、クレタ出撃前、カイロで彼は、死ぬかもしれないという事情を考え教会へ行き告白をした。彼の告白を聞いた神父は、その後、彼の所属部隊、滞在予定、装備について何かと執拗に問を発する。ここに至ってガイは始めてその神父に疑いの目をむける。

#### イヴリン・ウォー覚え書き (四)

相手は宗教の仮面をかぶったスパイであるかもしれない。この事件は、内心の秘密をうちあける相手との信頼関係の破壊として、彼の心にこだわりを残す。そしてロンドンに帰った彼はドイツとソ連の間に戦争が始まったため、イギリスがソ連に戦車を送る話をきく。北アフリカの砂漠でイギリス軍自身が戦車を必要としているのに何故にというのが、ガイの心である。しかもかつてソ連は、ドイツと条約を結び、そのニュースこそは、ガイが歴史上に自分の参加する意義を発見するってみれば邪悪な現代が具体化した一例であったはずだ。その一当事者たるソ連へ援助を送るとはいかなることか。しかしイギリス国民は、それを是認しているし、それが大きな政治の流れでもある。政治は生きた力である。一たび動きだし勢いがつくと、たとえ最初は誰れかが手をつけたにしてもその当人さえ止めることは出来なくなる。別個独立した論理、それ自体の生命をもって動く大きな歴史のメカニズムはもはや彼個人の感傷とは相容れない。

ロンドンに帰った後ガイは三度、軍の仕事に関与することとなる。この前後の事情は、初期のウォーらしい筋立てで偶然のもつおもしろさ、あるいは恐ろしさのようなものを示して精彩をはなっている。彼は連合軍と、ユーゴスラビアのゲリラとの連絡将校として、イタリア経由でバルカン地方へ行くこととなる。ここでチトーの引いるユーゴ独立軍と、連合軍との折衝の役につく。従って彼がこの作戦で実際に担当するのは、むしろ戦闘というよりは、ユダヤ人難民を避難させる仕事など、裏方的役割であった。その為彼は、連合軍と、チトー軍との間にたって苦勞することとなるのだが、ここで彼はその仕事をもって自分の行なうべき役割としてそれを遂行する。戦争当初彼が思い描いていた役割とは、あくまでも邪を正すための戦いの場における役割であって、それこそは彼の人生の目的と考えたわけである。しかし戦争の経過に従って、たび重なる背後におけるみにくい、あるいは御都合主義的な、それでいて、同時に何人も阻止できない、ってみれば時の勢いともいえる全体を動かしているメカニズムによって、純粹なものばかりでなく、そこには様々な不純な要因のあることを知って、必らずしも当初のそれと異なった形であれ、そこに自分の役割を発見してそれに力を入れるという状



況に変らざるを得なくなってしまう。

ガイはそのような心境になったが、それを決定的にした、あるいは最終的に確認した事件が生じた。ユダヤ人の避難民のなかで、指導的立場にいる女がいたが、戦争も終りに近ずき、ガイも本国へ引きあげる事となった頃、彼女は、彼にむかって、次のように述べた。「悪に染まっていない人なんてあるんでしょうか。ナチだけが戦争を望んでいたというのはあまりにも単純に物をみすぎています。共産主義者だって戦争を望んでいました。戦争は彼らが権力を得る唯一の方法だったんですから。我々の多くも戦争を望みその結果ドイツ人にしっぺ返しをされ、民族の国家を作ることが早まりました。私には、戦争への意志、死の願いというものがあちこちにあるように思えます。善い人でさえも戦争によって個人的名誉が実現されると思った。彼らは、殺し、殺されることで男らしさを主張し得た。彼らは利己的で怠惰であることかわりに困難を受け入れるでしょう。危険が特権を正当化します。非常に多くではないかもしれないがそう思っているイタリア人を知っています。イギリスにそういう人はいなかったでしょうか。」と。ガイは答える「神さま、私もその一人でした。」邪しき正体をあらわした現代というものに対し敢然としてたゞ伝統の正しさの証明に自分の役割があると決意して、そのために軍隊に参加したガイではあったがこの場に至って彼は、そういう自分のうちにも邪まなものがあるということを認めざるを得なくなった。いってみればそれは無条件降伏なのであった。

ガイが最後に自己の内にも邪まなものがないわけではないこと認めざるを得なくなった。それを認めたのは、ユダヤ人の一難民の言葉であったし、それを聞いて素直に降伏することになったのは、そこに至るまで、様々の外部的力により、それを受入れる素地が出来ていたことによる。しかしそれにもかかわらず彼は、自己の役割というものは見出した。フライト家のセバスチアンは、諸々の束縛に抗して自分の意志を通した。それは他の人々、一般の人々からみれば風変わりな特異な人生であったかもしれない。しかし彼はそのように振舞うことで、他面から

#### イヴリン・ウォー覚え書き (四)

みれば、神に近いところにいると評されるような、人生を送った。ジュリアが様々な抵抗で我を主張せんとしながら、最後は自ずからの育ったカトリックの教えの力によってそういった生を断念し、自ずからの占めるべき地位といったものを考えることになったこととも同じ意義をくみとることが可能である。いってみれば、我々の日常の生活を通して、その背後に我々が知ることの出来ないある力が働いているのであって、その力は表われ方も多様である。ウォーは、それが内的なものとして働くことをフライト家の生を通し、外的な力として働くことを、クラウチバック家のガイを通して我々に呈示した。